

# 「数理科学」は語る

30年前から現代へのメッセージ

鈴木 皇

1979年3月号

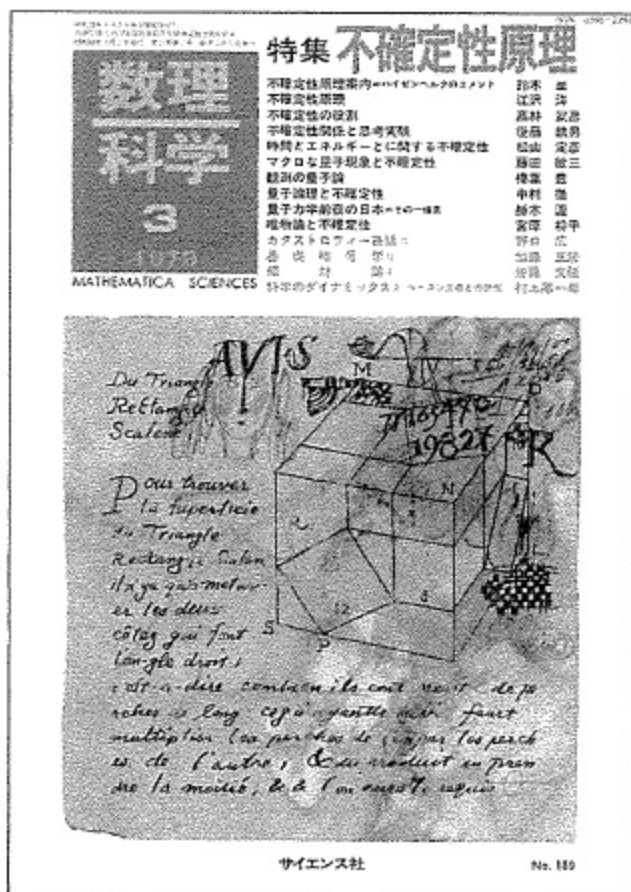
[ノーベル賞速報] 2008年10月8日記。昨夜の短いニュースにつづき、今日の朝刊に、南部・益川・小林三氏の楽しそうな顔写真が一面トップに大きく出ている。低迷している日本にとっての朗報である。三人ともに日本人というのも、物理学的に適切であるが、嬉しい。つづいて、下村脩氏の化学賞。もう言うことはない。

湯川先生の時は、戦後で疲弊していた日本に希望をもたらした。物理を専攻しようという人たちが明らかに増えた。今回はどうだろう。政治は混迷し理科離れが憂慮されている。四人の受賞者は、みんな元気で楽しそうだし、「研究は楽しくなければ」とも言っている。四人の半分の国籍が米国なのも、仕方ないことだろう。四人ともスバラシイ人柄とお見受けする。面識がないから、失礼を顧みず、人物短評を述べる。

私は低エネルギー電子散乱が専門だったので、高エネルギーの事は全くわからない。しかし、南部さんの『クォーク』は旧新版とも精読して、さすがと感じた。独創性にあふれたオールマイティーの思考力との定評。南部さんの旧制第一高校理科甲類の同級生には秀れた物理学者になった人が多い。抜群の成績の南部さんをはじめとして、統計理論の富田和久、独特な思索家の小野健一、そのほか地球の磁気ダイナモ論の力武常次、統計理論の市嶋勲、船の造波抵抗を打ち消す乾崇夫の球形船首の発案は、もしあればノーベル工学賞は確実。

益川さんが英語が苦手なパスポートを持っていないというのには今の時代に驚き。クォーク クォーク と鳴いたのは北海の鳥で、命名の時から、何羽いたのか謎々にされていた。益川さんは、その数をフロで着想したとか、アルキメデス級である。賞など要らないと益川さんは言う。たしかに賞は純粋な探求心を損なう。賞は廃止したほうが良いと言う評論家(村上陽一郎)もいる。選考は人がするのだから適当でないこともある。今回も、明らかに遅かったと思う専門家は多いだろう。賞も、社会を明るくし若い人の励みになるなら可なり。

益川さんの自称天才的ヒラメキと小林さんの緻密な



解析の名コンビも絶妙で、並ぶとユーモラスである。二人とも思考の指標とした、南部さんとの同時受賞を光栄とし南部さんも益川・小林理論をほめる。反目も絶無ではない競争の世界で、心が暖まる話である。

幸い、これで30年前の不確定性原理特集号について感想の原稿を書く余地がなくなった。不確定性原理は1926年に確定されたので新しいメッセージなどない。懐かしい村松・安岡さんと編集した、この特集号は良くできている。強いて30年にコジつけるなら、南部さんの文化勲章と益川・小林の仁科賞は、いずれもほぼ30年前で、これこそ現代への激励のメッセージである。

(すずき・ただす)